



1 猫髭堂

サラリーマン、月給取り、勤め人、ああ、私もその末席を汚す者ではあったのだけれど、このサラリーマンというものが実は自分の性に合っていないのではないかしらんと今になって思い始めたのはいくらなんでも遅すぎた。

しかし遅すぎたとはいうものの、イヤなものはイヤであり、それはもう究極的に絶対的にイヤであったから、それから私は会社に行かずにひねもす家の中でぐうたら惰眠を貪るようになったのだ。

ひたすらそれを続けていたら、会社の方は自動的にクビになっていたらしく、なおかつ本人の都合によるというわけで退職金も出なかった。

それでもなんもかんもほったらかしにしていたところ、今度はとうとう蓄えの方が尽きてきた。数日間はただ無精が故に我慢して、ガス代やら水道代やらアパートの家賃やらには知らん顔を決め込んでいたが、しかし空腹には耐えかねた。これもまたほったらかしておけば慣れるものかと思っていたが、どうやらそうもいかないようなのである。

必然的に私には収入がいることとなり、つまり何らかの仕事を探さざるを得なくなったわけだが、しかし元からサラリーマンが勤まらなくてこうなったわけだから元のさやに収まるつもりもさらさらなくて、従って通常の意味での働き場所を探す気がしない。

どうしたものかともう新聞も止められているから古新聞を取りだして求人情報など探してみたのだが、こういう広告はなんだか怪しげに見えて仕方がない。紙面全域を隅から隅まで探してみたのだがこうなればいっそ一番怪しげな仕事にしたれ、実際とんでもなければまた辞めりゃあいいやと投げやりになってきてこんな広告に目を付けた。

未経験者可、高給（場合によっては）

完全歩合制

猫髭堂

この（場合によっては）の部分の正直さ真摯な態度に感心し、はたまた仕事内容が一切不明なこと、及び怪しげな屋号、これらにココロ打たれるものがあったので、早速私はこの猫髭堂なる事業所だか店舗だか工場だかなんだか知らないがとにかく行ってみることにしたのであった。

住所を頼りに探しに行くと場所はちょっとした町並みでしかしなだか昭和初期を思わせるような懐かしさの混じる木の扉やオンボロのもう店を閉めた木造家屋、そんな並びにやっぱりこれまた時代がかった木造平屋の建物で、その間口の上に大きな自然木の板看板を掲げていた。猫髭堂と楷書で金色に彫ってある。なんだかモナカでも売っていそうだ。

その古式ゆかしき門構えをいきなりスミマセン、がらりと曇りガラスの引き戸を開けるが誰もいない。並んでいるのは筆筆筆。辺り一面筆だらけであった。駄菓子屋のごとき木の台の上ショウウィンドウ、あまっさえ壁にまでかけられた木の枠に筆筆筆筆。細いのや太いの、短い長い、黒いの白いの。

書道用品店かとも思ったが、それにしても掛け軸も書の一つもすずりも墨も見あたらない。むしろ、

「筆屋かな...」

と我知らず小さく声を出していたのがいきなり、

「ええ、左様に御座います」

ときたから驚いた。見ればいつのまにまかりでたものか、つい目と鼻の先、店の土間から一段あがって畳敷となったそのなんだか昔の和服屋の番頭が座っていそうな木枠の囲いの中にちょこなんと小柄な初老の男が座っていた。

一見茶道のお師匠然と和服を着こなして品相いやしからぬと言いたいが、いや、どうにもいまいち信用しかねる雰囲気があったのは、たぶんにその人相が読めないからで、小造りの年の割には皺のないのっぺりした顔が微笑んでいるような済ましているような、傲岸なような優しいようないづれとも決めかねる、人に心を見せない風に思えたからであったろう。

「何かお探しのお品でも」

お客と見られて下手に出られたからこれはあわてて逆に客でないとわかったときの上から目線が辛いから、せき込みながら相手のそのまた下手にへりくだって新聞広告を見て来たのだということの説明すると、

「あ、ナルホド。歓迎ですね。最近はナカナカなり手もいませんで」

いきなりの上から目線にはならんだが、さりとして丁寧なわけでもなく相手は相当のやり手と見た。

「しかしまたどのようなお仕事で...」

筆職人というモノでもこの世にあるのであろうか、それはそれでほんの少し面白そう、しかし主人は済まして、

「猫の髭を買います」

「猫の髭？」

「左様、貴方が猫の髭を捕ってくる。私がそれを買いますな」

猫の髭を捕ってくる？それはまた変わっている。少なからず驚いたが、しかし確かに興味深い仕事ではあるのかもしれない。

「ごらんなさい、これらの筆を」

片手を挙げて店のぐるりを示しながら、主人は語った。

「これらは全て猫の髭なのです」

「ははあ？」

「左様、全て、ぜーんぶ、最高級の猫の髭。ご存じでしたかな、超一流の筆とはこれ全て猫の髭にかなうものはないのです。超一流のその道の達人たちの筆はこれ全て猫の髭によるものであるのです。かの日本画の巨匠東山魁夷、古くは円山応挙、あるいは幕末の志士金田貧之助...ご存じでしたかな？」

「いや、知らんです。最後の一人など特に知らなかったです」

「知らんでしょうな、私もよく知らんですから。まあ、なにとはともあれそういうわけで、この猫の髭という繊細かつ大胆な腰の強さ、芯あくまで強靱でありながらも流れる水がごときしなやかさ、これが究極の筆の毛として珍重されるわけのものなのです」

なんかすごくうさんくさい。まあ、それはそれでも構わないがしかしなんだか内職じみている。内職と言えば相場が安い請負作業と決まっているから例えばマッチの先に燐を塗って一本五十銭、熨斗の水引拵えてこれが一つで1円30銭、そんな連想しか浮かばない。家賃だけでも4万はかかる。食費にたばこ銭を加えれば楽に8万円は突破するであろう。例え猫の髭一本3円で買ってもらえとしても月に2万本だか3万本だか集めねばならないではないか。冗談ではないと腰が引けたところを見抜いたごとくに、

「一本千円で引き取ります」

一本千円?10本1万円!つまり一日10本も集めれば月々楽に2~3万にはなる勘定で、とっさにこれこそ自分の天職と心得た。猫一匹10本以上の髭は生えているであろう。世の猫さんたちには気の毒ではあるが、うまいこと手なづけてその髭引っこ抜かせていただければ一日一匹猫の相手をするだけで後は遊んで暮らせる身分である。こんなうまいハナシが転がっているとは思わなんだ。世の中まだまだ捨てたものでもないのかもしれない。

2 かくして私は猫の髭をば手に入れん。

そういうわけでその日から私は猫髭の狩人となり、自分のアパートの周りで猫を探し出したというわけなのだ。ところがこれが案外いない。昔はノラネコなんぞそこいら中にいたはずであるが、気がついてみれば当節ノラネコなどはあまり見ないものだ。

いや別に飼い猫だって構いはしないのだが、猫そのものがなかなかいない。無論地べたばかりを見ていたわけではない。猫は猫であるから決して犬のように地面にばかりいるとは限らない。塀の上、屋根の上、車の下にもいるかもしれない。

それでも1日1万円の夢がちらつくから一生懸命探し回ったが、人が見たらばなんとしよう。昼日中から中年男が目を皿のようにして隣近所を物色している風にしか思えまい。しからば夜中に実施すべきか。なるほど猫は夜行性であろうからそれは理にかなったことではあるのだが、そうなるともう怪しさ爆発である。

えい、もうどうとでもなれと昼夜を問わず探し続けていたから用心深い人ならばその筋の役所に通報くらいされたかもしんないが、しかし目も慣れてきたのかどうやらたまには猫さんの姿を発見できるようにはなった。

なったのにはなったのだが、さてその先が進まない。はたと気がついてみれば当然のことではあったのだが、いったい猫というものは犬と違ってそう簡単には人に寄ってこない。これが犬ならなにがなんでも尻尾を振って寄ってもこようが、お猫様の場合は全然である。

そもそも猫というモノは子猫のうちこそミャーミャーってじゃれついてきたりしてその愛くるしさは特別なものがあるが、それが長ずるに従って傲岸不遜の顔となる。それは犬でもアザラシでもそんなもので、それは案外幼い頃は可愛がってもらおうという自然の摂理なのかもしれないが、猫の態度の急変はその中でも一段格上の感がある。飼い主がいて猫がいるのだから、猫がいるから飼い主がひっついてくるのだから判然としない。

発見はしても捕まえなければなんにもならぬから努力する。それこそ猫なで声で呼んでみたり、煮干しをちらつかせてみたり、なんだかこれほど努力するならサラリーマンだって勤まっていそうなものだったと思わぬでもなかったが、いやしかしこうして直接の目的に対して努力するのと紙切れを前に努力するのではおのずとモチベーションが違ってくるものだ。

真摯な努力は結果を伴う。私はある日ついに一匹の猫を捕まえた。最初おそるおそる近づいてきたのはたぶん近所の飼い猫なのであろう。白黒まだらのごく平凡な猫である。右手に煮干しをちらつかせると、用心しながら寄ってきたから、いい子いい子とほめながらそおっと背中を撫でてやると、安心したのかゴロゴロ足に体をすり付けてきた。とっさ、その一瞬の間隙をついてヤッと後ろから背中を驚掴みにしてやった。

驚いたのは猫の方だ。ブギャーッと奇声を発すると滅茶苦茶に体をくねらして暴れる暴れる。こちら必死だからそれを抱きすくめてなんとか髭を引っこ抜こうとするのだが一筋縄でいくものではない。たちまち腕といわず顔といわず噛みつかれるわ引っかかれるわの大騒ぎである。

猫はとうとう逃げ出してしまった。こちらは全身血まみれの有様となったが、右手を広げるとそれでも猫の髭を3本手に入れることに成功したのだった。

3 猫への道

私は傷だらけとなってかつその疲弊たるや著しいものがあったのだが、とにかく髭は手に入れたからなんとかかんとか猫髭堂に顔を出した。

「これはまあ手ひどくやられましたなあ」

と件の主人は一応言いはしたものの、本心同情している風もなく、しかし約束通りに三千円は渡してくれた。

しかし都合三日もかかって三千円では割にあわない。のみならずそもそも毎回毎回こんな目に会っては体が持たない。ほどなく全身傷だらけの血だらけの包帯男ができあがり、破傷風くらいにはなるだろう。ことによれば失血死だってあるかもしれない。

そんな愚痴をくどくどと述べ立てていたら、

「そりゃあアナタ、やり方というものですよ。猫を相手にするのですから、こちらも猫に近づかなければなりません」

そう言うてくるりと顔を拭った主人の仕草はなるほどなんだか猫じみていたのだった。彼は目を細めて心なしか喉をゴロゴロ鳴らしながら、

「最低でもあなた、猫語はマスターしなければ」

「猫語ですか？」

「左様、例えばこんにちは、なら、ニャー」

「ニャー」

「さようなら、なら、ニャー」

「ニャー」

「そうそうナカナカ筋がよろしい」

筋がいいのだろうか、なんだかよくわからないが。しかし主人に言わせれば猫語ほど発達した言語はないのだそうで、発音の出だしの高低、途中のコブシ回し、最後の切り方など、同じ台詞でも最低10は違う意味を持つのだそうで、その複雑さ繊細さにいたっては英語はおろか、日本語中国語、ハングル等も及びもつかないほどの高等な言語なのだそうだ。

それから私は三日三晩アパートにこもって、ひたすら猫語の特訓に励んだものだ。ついでに身体の拳動などもこれまた重要な意味を持つとのことだったので、体をくねらしたり、首を傾げたり、なるべく猫に近づくように努力した。途中で大家が家賃の催促にきたが、私が身をくねらせてニャーと言ったら退散していった。理由はよくわからない。

そうこうしているうちになんだか自信がついてきたようなので、四日目にして外に出ると、早速猫を探し出して特訓の成果を試してみた。

「ニャー」

「ニャー」

「ニャ？」

「フギャー!」

いきなり引っかけられた。だめではないか。全然ダメである。

4 ねこじゃねこじゃ

すっかり失望した私は今度は鼠を買ってきた。鼠といってもハムスターである。498円もした。そいつをつがいで買ってきた。これをもって猫を釣ろうという魂胆であったが、まさかホントにこれを餌とするのはちと残酷なので、小さな檻に入れて道ばたに置いておく、そうして物陰からこっそり猫の近づくのを待とうというのである。

ひじょうに都合のいい話ではあるが近所に家屋を撤去した後放置された空き地があった。私はその真ん中にハムスターの檻を置くと、自分は隅っこに段ボール箱をかぶってジッとしていた。無論隙間からのぞきながらである。昼間のうちはけっこう汗をかいた。はたまた下校途中の小学生から、おじさん何やってんの、と問いかけられたりもしたが、彼らはそのご両親が連れて帰ってくれた。変な人に話しかけてはダメとか聞こえたが、同感である。

なかなか猫は来ない。じっと辛抱しているうちに眠たくなってきた。ついうとうとしてからハッと目が覚めると外が暗い。もう夜中であるが何時なのか見当もつかない。

しかしである。どうやら猫の気配がするではないか。段ボールの隙間から覗いてみると、いるいる。4～5匹以上はいるだろう。暗がりで見ばかり光らせて、ニャーニャーゴロゴロいっているではないか。

へっへっへ、しめたしめたと頃合いを見計らって段ボールをガバと脱いでみたら、ぎょっとした。

いるどころのはなしではない。そこいらじゅう猫だらけ。空き地一面はもとより塀の上まで猫が鈴なりである。そうしてウニャウニャ言っている猫、毛づくろいなどしている猫、目を細めて眠っているような猫、丸くなっている猫、背伸びしている猫。取り囲まれているのはハムスターではなくこの私なのだ。

試しに一步踏み出してみると、それらの猫の大群が一斉に背を丸めてフーッとうなった。これは危険である。大変である。一大事とはこういうことを言うのだ。

そしたらそのうちでも凶抜けて大きな黒い猫が近づいてきた。どうやらここの親分であるらしく、目つきが悪い。

親分猫をもなるとやはり違うものだ。悠揚迫らぬ横柄な態度で私の周りをぐるりと回って品定めでもしているよう。前足を舐めながら細目をあけてジロリと私を睨んだ。

「ニャ」

(おめえか、最近俺たちの後をつけまわして、おまけに仲間の髭を三本引っこ抜いたっちゅうやつあ)

せっぱ詰まると人間なんとかなるものらしく、おびえた私には猫語もなんとか通じたようだった。ついでながら猫語ともなるとかように一声の抑揚をもって多くの意味を表すことができるのである。

「ウニャ」

(へえ、なんだかそんなことをした気がします。それはもう魔が差したと言いますか、とんだ出来心というやつで)

「フニャ」

(八つ裂きにしてその頭蓋骨かじってやろうか?)

これだけ猫も集まると、そういう末路も現実味を帯びてくるが、猫に頭蓋骨かじられて死ぬなど、そんな思いも寄らない死に方はぜひとも避けたいから、震え上がった私は必死になって身振り手振りを交えながら猫語で事の次第を説明した。なにやろうなりながら悶え苦しんでいるようにしか見えないから人がいなくて幸いであった。心筋梗塞の発作くらいの迫力はあったろう。

とにもかくにも私の拙い猫語でも、どうやら私が食うに困っていること、猫髭堂のこと、そこで猫の髭を買ってもらえること、事の次第は概ね伝わったようである。

猫たちはふーんといった表情でしばらく額を寄せあってウニャウニャ相談している様子であったが、それじゃあとにかくその猫髭堂に連れて行けという。

5 事の顛末

次の日、私は猫33匹を伴って猫髭堂を訪れた。ちょっとした失敗はあったものの、とにかく33匹の猫を連れてくることに成功したのであるから、仮に1匹3本の髭を手に入れたとして99本の猫の髭、9万9千円にもなるではないかい。

なにしろ33匹の猫を後ろに従えて、というか本当は追い立てられてだが、私は猫髭堂を訪れた。さすがに主人もたまげた様子であったが、そこはそれ、したたかな男であるからすぐにその本性は隠して何食わぬ顔で我々を出迎えたのである。

「これはまた、ぎょうさん連れてきましたなあ。しかしアナタ、私の欲しいのは髭の方で、本体の方は無用ですがな」

「そこいらへんはうまいことお願いします。とにかくこんだけ連れてきたのですから。なんなら髭1本900円に負けときます」

「そう言われてもアンタ、髭抜くのもコミのはなしでありますから」

私と主人がそんなやりとりをしていると、件のボス猫が後ろから私の背中をガリリとひっかいた。痛い。ニャ、とやつは発言を求めて、その先はやつと主人の問答となったが早口すぎて私にはわからなかった。

「ニャーニャー」

「ナゴ」

「ニャゴニャーニャー」

それでお互い握手を交わしたではないか。なんのことだかわからない。

「いったい何のことです」

「いや、アナタ。よいことをしてくれました。今この親分猫と契約が成立したです」

「は？」

「ここの猫、みんなして抜けた髭をここに持ってきてくれることになったです。そいで髭3本につきマタタビの実1個」

「え、そんじゃ私の取り分は？」

「そりゃないですね、あくまで私と猫との直接取引の成立ですから。まあここまで案内してくれた手間賃として1000円あげましょう」

「1000円？ たった1000円？」

「私の気持ちです」

こんだけ苦労した結果がとどのつまりは1000円札1枚であったか。

6 後日談

仕方がないのでそれから私は一人寂しくアパートでハムスターの世話をしていたのだが、適当に餌を与えていただけなのに、いや、これが増える増える。数匹のコネズミを生んだなあと思っていたら、そのコネズミがまたまた子を産む。ねずみ算ってホントだなあ。あれよあれよという間に数十匹のハムスターの世話をする羽目になってしまった。

私は毎日そのハムスターたちと暮らしていたのだが、しかしこいつらはかわいいのはかわいいのだが、猫に比べると少しオツムの方が足りないようで、何を考えているのかわからない。そもそも何か考えているのだろうか？記憶力などないに等しく、今かじっていたヒマワリの種をなんの拍子かぼとりと落としてしばらくボーッとしていると、もうそのことは忘れていくらしく、あ、ヒマワリの種がない、ない、とあわてている。

アホだなあとぼんやりそれを眺めていたらふと気がついた。よく考えたらハムスターにだって立派な髭が生えている。猫の髭が筆になるならハムスターの髭だって立派な筆になるだろう。

というわけで私はそれから数ヶ月を経ずして鼠の髭の筆屋として大成功したというわけなのであった。

だが、ほどなくすると巷には鈴虫の髭の筆屋やらセキセイインコの羽ペン屋やら、なんだか似たような商売が氾濫し、私の商売も左前になってきた。やはり世の中甘くはないようなのである。